

【9】「板東俘虜収容所」で結ばれた、日本とドイツとの交流

板東俘虜収容所でのドイツ兵俘虜たちの生活の様子や活動をとおして、板東俘虜収容所が、なぜドイツと徳島との交流のきっかけとなったのか、説明しよう。



板東俘虜収容所 要図
(ドイツ日本研究所蔵)



板東俘虜収容所 全景
(現在の鳴門市大麻町)

「板東俘虜収容所」とは

板東俘虜収容所は、第一次世界大戦によって俘虜となった中国山東省青島のドイツ兵を収容するために、1917(大正6)年、徳島県板野郡板東村松(現在の鳴門市大麻町松)に建設されました。収容所での俘虜の処遇は、基本的には、当時の国際規約に基づいて行われましたが、板東俘虜収容所では所長松江豊寿^{とよひさ}の人道的な考えの下で、国際的な標準をはるかに上回る処遇が行われ、その運営はドイツに帰国した元俘虜からも高く評価されました。

松江所長の人道的運営と俘虜の生活

松江所長は可能な限り俘虜の人たちの自由と自主的な活動を認めました。約1000名のドイツ兵がもともと従事していた職業は、機械・金属・飲食料・日用品などの製造や教員・宣教師・法律家と多彩でした。俘虜の中にはこうした経験を活かして、所内にさまざまな商店を開く人もいました。また、所内には2つの印刷所があり、収容所内だけで使用することができる紙幣や切手の他、「デイ・バラック」という新聞も発行しました。さらに俘虜が地元の人たちに先進的な技術指導を行うことも積極的に行われ、洋菓子、パンなどの作り方や、西洋野菜の栽培、牧畜、建築設計などの技術が伝えられました。



松江豊寿 所長(1872~1956)
(鳴門市ドイツ館所蔵)



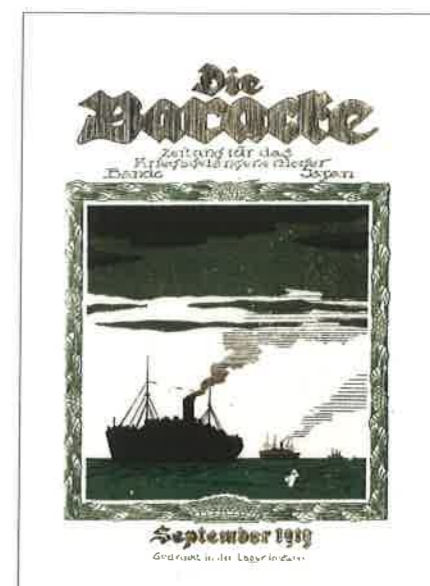
鳴門市ドイツ館 全景

文化・スポーツ活動と地元の人々との交流

俘虜は文化・スポーツ活動も盛んに行いました。特にサッカー・クリケット・テニスなどが盛んで、収容所前には専用コートが整備され、俘虜によって管理運営されていました。当時としては珍しかった体操などには近隣の体育教師や生徒が見学を訪れ、演技



板東俘虜収容所新聞「デイ・バラック」
第1巻の扉(鳴門市ドイツ館所蔵)



板東俘虜収容所新聞「デイ・バラック」
最終版表紙(鳴門市ドイツ館所蔵)

の指導を受けたこともありました。そのほか、収容所北側の阿讃山脈を越えて瀬戸内海方面まで水泳に出かける遠足活動が人気を集めていました。

また、文化活動として音楽会・演劇会・講演会・展覧会などが開催され、図書室では図書の閲覧・貸し出しが行われました。音楽会は楽団や合唱団が定期的に演奏会を開き、ベートーヴェンやワーグナーなどの数々の名曲が演奏されました。それぞれの活動にあたっては、印刷所でプログラムや資料などが印刷販売されて、俘虜の人たちに広く参加が呼びかけられました。

俘虜の人たちによるスポーツ・文化活動は、本来は収容所内での心身の鍛練と娯楽を目的としたものですが、収容所外でも公開され、地元の人たちとの交流に大きな役割を果たしました。

「板東俘虜収容所」と日独交流

1919(大正8)年、ドイツ兵達は、収容所内の池の畔に、収容所で亡くなった俘虜達の慰霊碑を建設しましたが、翌年、解放によって収容所が閉鎖された後は草に覆われ、長く忘れられていました。第二次大戦後、その慰霊碑の存在に気づき、長年にわたって清掃活動を続けてきた高橋春枝さんなど地元の人たちの活動が新聞で紹介され、これを知ったドイツ大使が1960(昭和35)年に現地を訪れたことがきっかけとなり、元ドイツ兵俘虜と板東の人たちとの交流が再び始まることになりました。

その交流は1973(昭和48)年に鳴門市とドイツ・リューネブルク市が姉妹都市となるなどますます活発となっています。現在、収容所跡には「鳴門市ドイツ村公園」、その近くに「鳴門市ドイツ館」が建設されて、元ドイツ兵俘虜から寄贈された当時の貴重な写真や資料が多数展示され、日独交流の拠点となり、多くの人が訪れています。



バラック内部の様子
(鳴門市ドイツ館所蔵)

2007(平成19)年には、徳島県とドイツ・ニーダーザクセン州が友好提携を結んでいます。

